

国文学研究

第百九十二集

防人歌蒐集時の家持独詠歌再考

——万葉集卷二十における散文的表現——

空海の「文」をめぐる一考察

——『遍照發揮性靈集』にみる実践と思考——

『多武峯少将物語』における叙情の方法と物語化

——師輔周字法要の唱和歌を基点として——

『うつほ物語』の「盗まれない」女二の宮をめぐる

——「挿話」に示される人々の個性——

菅原道真とその母

——『拾遺抄』所載歌の問題——

対策試の故事について

——東坊城和長「桂葉記」「桂林遺芳抄」を巡って——

安積良斎の長編古詩「俠客行」について

——旅の副産物——

進化論と漱石文学

二つの仮名使い

——キリシタン版『落葉集』の場合——

〈特別寄稿〉

想い出される「与謝野研究」のことも

「仮字」の論

——百年河清ア候ツカ——

〈書評〉

田淵句美子著『女房文学史論——王朝から中世へ——』

中島礼子著『国木田独歩と周辺』

金子亜由美著『明治期泉鏡花作品研究——父と「女」の問題を中心に——』

吉田竜也著『正宗白鳥論』

松田 聡 1

河野 貴美子 16

門澤 功成 30

小野寺 拓也 42

御手洗 靖大 54

濱田 寛 68

池澤 一郎 81

石原 千秋 109

今野 真二 95

杉 逸見 久美 126

杉 本 かつとむ 122

加藤 昌嘉 136

芦川 貴之 132

鈴木 啓子 140

木村 洋子 145

新刊紹介 彙報 編集後記

菅原道真とその母

——『拾遺抄』所載歌の問題——

御手洗 靖 大

一 はじめに

『拾遺抄』と『拾遺和歌集』（以下、『拾遺集』）に、菅原道真の母を作者とする次の一首が入集している。

すがはらの大臣の元服し侍りけるよ、ははがよみ侍りける

ひさかたの月のかつらもをるばかりいへの風をもふかせてし
かな

（『拾遺抄』雑上 四三八、『拾遺集』雑上 四七三）

道真の元服にあつての所詠という。紀伝道をきわめ、月の桂を折るほど栄達し、菅家を盛り立ててほしいとの祈りが詠まれている。当該歌は、「月の桂も折る」、「家の風」と、漢籍由来の表現が用いられる点が特徴的である。特に、「月の桂を折る」の表現は、『晋書』「郤詵伝」を典拠とし、「折桂」は官吏登用試験に及第することを意味した。

「折桂」の故事をふまえた和歌は、十世紀半ば以降に多く見られるものであり、九世紀半ばのこの道真母詠は、突出して早い例

である。山崎桂子は、宮廷に出入りせず、当時の和歌史にも見えない作者が当該歌を詠むとは考えにくいとして、仮託説を提示した。^①

本論では山崎の仮託説を承けつつも、『拾遺抄』の問題として当該歌を考えたい。すなわち、道真母の時代から百年後の『拾遺抄』に、当該歌がなぜとられたのか、そして集中においてどのように位置付けられているのかを、考察する。

当該歌は、『拾遺抄』の一首として見ると、作者が詞書中に記される点、特異である。同様の詞書を持ち、同じく母が子を思う歌は『拾遺抄』にもう一首見える。

としのぶが流され侍りける時に、流さるる人は重服の装束をしてなんまかるとときき侍りて、母がもとよりその衣ども調じて遣すに、そのきぬに結び付け侍りける

人なししむねのちぶさをほむらにてやくすみぞめのころもきよきみ

（雑下・五五九）

安和の変で流された橘敏延の母の、悲痛な歌である。いつ、誰が誰にむけて歌われたのかという状況が詞書で説明されており、

配流に赴く子を思う母のドラマが描かれる。²⁾

一方道真母詠は、道真の元服にあたって、母が道真の栄達を祈って詠まれたことが明示される。『拾遺抄』の母の歌については稿を分けて論じたいが、母が子である道真の栄達を祈るという点、『拾遺抄』における道真の位置付けにも関わる。かねて『拾遺集』では、集中の道真像が問題とされてきた。道真は三代集にわたって歌が取られるが、『拾遺集』で初めて詞書中に配流の事情が明示され、すべての歌において政治的敗者像が全面に押し出されているというのである。先行研究は道真母の歌に触れていないが、道真母詠こそが、撰集当時の道真像を如実に反映していると考ええる。

また、道真の問題に関して、『拾遺抄』への言及は管見のところ見出せない。しかし、道真母詠は『拾遺抄』と『拾遺集』では配列が異なり、『拾遺集』は『拾遺抄』の単なる増補とは言えない。ここに配列の分析から、『拾遺抄』の位置付けを考察するべき所以が存する。

考察にあたり、まず「折桂」の表現史を『拾遺抄』成立時代まで追うこととする。これにより、当該歌に見える道真像と、『拾遺抄』成立当時の道真像が明らかとなるだろう。その上で、『拾遺抄』の配列とその位置付けを分析することとしたい。

二 「折桂」故事の受容

月の桂を折る表現は、『晋書』「郗詵伝」の「臣拳賢良对策、為天下第一、猶桂林之一枝、崑山之片玉。」⁴⁾によるものである。

郗詵は、西晋武帝の対策に第一位で及第。その後昇進を重ね、雍州の刺史に任じられた。その時、武帝から榮転の所感を尋ねられ、答えたのが右の言葉である。自分は天下第一で及第したが、それは桂林の一枝、崑山から出るひとかけらの玉を得たに過ぎないと答えた。このような不遜な態度を廷臣は咎めたが、武帝は笑って許したという。

これが転じ、桂を折るとは、科挙に登第するという意で用いられるようになった。宋の葉夢得による『避暑録話』には、「世以登科為折桂。此謂郗詵对策東堂。自云桂林一枝也。唐書以來用之。」⁵⁾とあり、唐代以降盛んに使われたことが分かる。『白氏文集』には「折桂名慙郗（和春深二十首 卷五十六・二六六二）」など、五例が確認できる。

日本では、『文選』に当該表現が見えないためか、勅撰三詩集時代や島田忠臣などに用例は見出せない。「折桂」は、道真に至って用いられる⁶⁾。したがって道真の元服時点で、漢詩に用いられてもいない詩語を和歌に取り入れたとは考え難く、山崎の仮託説は首肯できる。

道真以降、『扶桑集』の菅原淳茂や大江朝綱の作などに、折桂の表現を用いた詩が見える⁷⁾。延喜七年（九〇七）大井川行幸の忠岑による序の中に、「桂折れる人をば、なべて老いたるをも若きをもとめしめ給ひ」（書陵部丙本忠岑集）の表現がある。歌書に初出する「折桂」表現となる。

『好忠集』にある、順百首の序文にも、「月のかつらををらざらむもくるし（四八五）」と「折桂」の表現を使う。曾禰好忠が詠じ

た百首歌に触発され、源順が詠んだ百首歌の序にあたる。好忠百首は天徳(九五七)九六二末の成立とされ、順は天暦七年(九五三)に文章生となつてゐる。順は天暦十年(九五六)に勘解由判官となつて以来、六年をつとめ、応和元年(九六一)に官途の沈滞を嘆く長歌を草して長官(藤原朝成)に訴えた。その長歌に対して大中臣能宣が慰撫の返歌をなしたことが『能宣集』や『拾遺集』に残る。その能宣の長歌の中に「折桂」の表現が見える。

源順つかさえ賜はらで世を恨みて、朝忠の中納言の許に
長歌よみて奉りたりけるを、聞き侍りて、人々あはれが
り、歌よみなどし侍りしかば、心一つに和し侍りてよみ
侍りし

世中を 思へば苦し 忘るれば えも忘れず 誰もみな
同じみやまの 松柏と ちよもちよもや つかへむと なが
き頼みを かくれぬの 下よりねざす 菖蒲草 あやなき身
をも 人なみに かかる心を 思ひつつ よにふる雪の 君
はしも 冬は年つみ 夏はなほ 草の螢を 集めつつ 光さ
やけき 久方の 月の桂を をるまでに しぐれにそほち
露にぬれ へにけるそでの ふかみどり いろあせがたに
いまはなり(以下略) (西本願寺本能宣集・四四七 傍線稿者)

傍線部「よにふる雪の 君はしも 冬は年つみ 夏はなほ 草の螢を あつめつつ」は、故事「螢雪の功」を対句的に表現し、雪と螢の「光」から、「光さやけき 久方の 月の桂を をるまでに」と、「折桂」へ転換する。この「月の桂ををるまでに」は官吏登用試験(対策)に及第したことを示す。苦学者順の姿を、漢

籍故事でもって巧みに表現している。なお、「螢雪の功」と「折桂」は後述『蒙求』にとられている故事であり、平安時代の文人に馴染みのある表現であった。

『拾遺集』に、藤原実頼による月輪寺参詣関係の歌が見える。
清慎公月林寺にまかりけるに、おかれてまうできてよみ
侍りける 藤原後生

昔わが折りし桂のかひもなし月の林のめしにいらねば

(集・雜上・四七二)

後生(九〇九)九七〇)は式部大輔・文章博士の経歴をもつ文人。『日本紀略』康保四年(九六七)二月二十八日条に、実頼が月輪寺に参詣したことが記される。この時の所詠であろう。

『拾遺抄』の成立する十世紀末まで「折桂」故事の表現受容を辿れば、以上となる。和歌では順、能宣、後生といった天暦以降の歌人・文人たちによって用いられた点に注目したい。

道真の時代から五十年ほど後の天暦ころに大江維時『千載佳句』が成立する。秀聯句を集めた詞華集であり、漢詩創作にあたって典拠を示す参考文献の機能も果たしていたと考えられる。「及第一」の劈頭が、白居易の「桂折一枝先許我 楊穿三葉尽驚人」であった。

これは、「喜敏中及第、偶示所懷」(『白氏文集』卷十九・律詩・一二六〇)から引かれたもので、従弟の白敏の進士及第を喜ぶという内容である。まず白居易が進士に及第し、この度の敏で、白氏一族から三人目の及第者が出たことを喜んでゐる。

折桂の表現を用いた詩が「及第」に分類されることで、日本で

も、官吏登用試験の及第を「折桂」の語句で表現できることが、提示されたのである。

また平安時代以来、貴族の幼学書として広く用いられた『蒙求』にも、「卻詠一枝 戴憑重席」と、折桂の典拠となった卻詠伝が示されている。故宮博物院本古注は、「卻詠一枝」に次のように記す。

晋書。卻詠。字広基。拳賢良对策。為天下第一。武帝。問之。卿才自以為何如。詠對曰。臣拳賢良冊為天下第一。猶桂林之一枝。崑崙之片玉。今詞場折桂始於此也。

源為憲の『世俗諺文』にも同様の本文が見え、『蒙求』古注を引用したと考えられている。¹⁰⁾

『世俗諺文』は『拾遺抄』から十年ほど後に成立する辞書である。『蒙求』古注と『世俗諺文』の両書に記される「今詞場折桂始於此矣」は、文壇での「折桂」はこれを典拠とするという意。

『蒙求』の当該古注は年代不明であるが、少なくとも『蒙求』自体は『拾遺抄』成立以前から読まれている。すでにこの時代に「折桂」故事が共有されていたと言えよう。

以上見たように、『蒙求』古注、十世紀半ばの『千載佳句』、十一世紀前半の『世俗諺文』と、「折桂」の故事・表現は広く共有されていた。道真母詠「月のかつらもをるばかり」は、この動向を背景にはじめて、評価され得たものと考えられる。ところが、当該歌が示す道真像は、未来の栄達を祈念される前途有為な存在なのであって、政治的敗者道真像とは異なっている。十世紀末の人々にとって、道真はどのような存在だったのだろうか。

三 怨霊から文道大祖へ

『拾遺抄』が成立する十世紀後半は、怨霊としての道真像が大きく変容した時期である。道真は大宰府に左降され、その地に没したが、死後二度にわたり名誉回復がなされている。

延喜末年に、右大臣への復官がなされた。最初の名誉回復である。醍醐天皇の皇太子保明親王の死去について、道真の怨霊が取り沙汰された。『日本紀略』延喜二十三年（九三三）三月二十一日条に、皇太子の死を「菅帥靈魂宿念所為也」と記す。その宣命（『政事要略』所収）にも、「贈本職。兼増一階爰示旧意以慰幽靈。」とあり、「幽靈」を慰めるため復官と贈位を行ったことが示される。この時期道真は怨霊としての性格をもった。

二度目は正暦四年（九九二）の贈位贈官である。道真の菩提寺である大宰府安楽寺の託宣（前年の正暦三年）に端を発し、正二位右大臣、正一位、太政大臣と、矢継ぎ早に贈位贈官が行われている。すでに谷口孝介が指摘していることだが、¹¹⁾正暦の贈位贈官は、延喜の復官とはその動機を異にした。復官時と同じく、『政事要略』に右大臣追贈、太政大臣追贈各々の位記が載るが、そこには怨霊としての道真を慰撫する内容は見えず、専ら生前の功績、文才を顕彰するものとなっている。

道真を怨霊や政治的敗者ではなく、朝廷で活躍した文人として顕彰する動きは、正暦の贈位贈官以前にも見える。慶滋保胤による寛和二年（九八六）の願文である。保胤は菅原文時に師事し、菅家廊下から出た文人であった。「菅丞相の廟に賽する願文」に

は、左の条文がある。

其一願曰。就天満天神廟。會文士獻詩篇。以其天神為文道大祖。詩境之主也。〔本朝文粹〕・卷十三・願文上・四〇〇〕

天神の廟堂に會して作文會を開きたい理由を「其の天神の文道の祖、詩境の主たるを以てなり。」とする。道真を「文道の祖」「詩境の主」と崇敬している。吉原浩人は「文道」について、「白居易を尊崇する慶滋保胤・大江匡衡ら勸学会結と重なる平安中期の紀伝道出身者が、『賦賦』に触発され、使用しはじめた一般化した」語であると指摘し、それは菅家の門流であるという同門意識によつて広がつたものとする。そして菅家廊下の同門意識と、白居易を始めとする詩人信仰が、道真信仰へとつながつたと考察する⁽¹³⁾。

道真を「文道の大祖」、学問神として崇敬していたのは、菅家廊下の文人たちであつた。「文道の大祖」道真は、栄達した文人道真のイメージに通ずる。この風潮の中に、正暦の位記に見える道真顕彰を配置することができる。

以上、十世紀後半において、道真母詠が描くような、学問を修め栄達する道真像が強く意識されてきたことがわかる。当該歌の『拾遺抄』入集は、当時の道真への讃仰に合致するものだったと言える。道真母詠が願う、栄達の期待される道真像と、模範的の人としての道真像とは、密接に関連している。文人の栄達の端緒となるのが「折桂」、すなわち修学の結果としての立身である。貴族官僚社会の顔見世ともなつたであろう元服時、これを母が歌として折る点に、学問の家としての強い意識が読み取れる。当該歌が菅家廊下の影響の強い後世の仮託であるとするならば、家門

意識の強さはなおさらである。

一方、『拾遺抄』の道真詠は、ことごとく政治的敗者の歌である。道真母詠との差異をどのように考えればよいだろうか。『拾遺抄』の配列から、道真母詠を考えたいが、その前に、公任が撰者となつた他の集における道真詠のありようを見ておきたい。

四 公任撰集中の道真

公任撰の集は『如意宝集』、『拾遺抄』、『金玉集』、『深窓秘抄』、『和漢朗詠集』があげられる。『拾遺抄』の前段階と目される『如意宝集』は断簡しか残らず、その中に道真の歌は確認できない。寛弘年間に成立したとみられる『金玉集』と、その後成立した『深窓秘抄』に入る歌を検討しよう。まず『金玉集』。

あつとしの少将みまかりてのち、あづまよりかの少将に
おくりける文を見て をの宮の大

まだ知ぬ人も有ける東路に我もゆきてぞすむべかりける
(雑・五三) 中務

忘れられてしまどろむ程もがないつかは君を夢ならでみん
(五四)

つくしよりふるさとおくりけるうた 菅丞相
君がすむ宿の梢をゆくゆくと隠るるまでにかへり見しかな
(五五)

おきにながされける時、ふねにのりて 小野篁
わたのはらやしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまの

つりぶね（五七）

『金玉集』は基本的に詞書を持たないが、雑部のみ、例外的に詞書を付す場合があり、道真詠も詞書を持つている。道真詠の前には、実頼による子息哀傷詠と中務の歌が置かれる。中務歌は『拾遺抄』の詞書により、娘の死に際し詠まれたことがわかる。その後、道真の歌が置かれる。道真詠詞書は、『拾遺抄』のそれと大きな相違はない。

注目したいのは、道真詠の次の歌である。「おきにながされける時」と小野篁の歌を配する。当該歌は『古今集』にも同様の詞書が入っている。篁の歌と並べることで、道真の配流が想起されることになるだろう。配所に赴くにあたって、都へ別れを上げると点も両首共通し、『金玉集』の道真像は政治的敗者といえる。

『金玉集』後、程なく成立した『深窓秘抄』には、『金玉集』と類似する箇所が多く、関連は密接である。ここにも道真の歌が見える。

邑上御製

いつしかも君にと思ひしわがなをば法のためにぞ今日はずみ
つる（雑・八一）

小野みやどの

まだしらぬ人もありけり東路に我もゆきてぞすむべかりける
（八一）

菅丞相

君がすむ宿の梢のゆくゆくと隠るるまでもかへりみしかな
（八三）

中務

忘られてしまどろむ程もがないつかは君を夢なれてみむ
（八四）

遍照僧正

末の露もとのしづくや世中のおくれ先立つ例なるらむ（八五）

兼輔中納言

人の親の心は闇にあらねどもこをおもふ道に惑ひぬるかな
（八六）

『金玉集』とは配列が異なっている。母への哀傷である村上天皇御製から、親の死を詠む遍照にいたるまで、家族とのさらぬ別れが配される。道真詠は、実頼と中務の子への哀傷に挟まれる。子を思う親の「心の闇」を詠む兼輔詠で、釈教的性格が濃くなっていく。

道真詠は哀傷歌ではないが、「ながされはべりて後めのもとにいひおこせて……」の詞書から、恋歌的な文脈の絡まない妻との離別を配したのである。母との別れ、子との別れ、妻との別れ、娘との別れ、親子死別の道理、子を思う親心の闇と展開する。

京を追われた悲劇的な人物としての道真像は、『拾遺抄』と通底している。道真詠に対する公任の姿勢が明らかになった。

公任は、以上に加えて『和漢朗詠集』を編纂するが、道真は漢詩しか取られない。公任は漢詩人として、道真をどのように捉えていたか。

道真の生涯は、右大臣にいたるまでの栄達と、晩年大宰府での謫居に二分される。道真詩句の出典となる『菅家文章』『菅家後

表：『和漢朗詠集』所収道真詩の出自

	和漢朗詠集上(四季)	和漢朗詠集下	所収詩合計
少年時代	1	0	1
文章博士時代	1	1	2
讃岐国司時代	8	1	9
帰京・宇多廷臣時代	12	10	22
大宰府時代	2	1	3
合計	24	13	37

集』は、ともに編年形式で配列されており、『和漢朗詠集』の詩句の出入を道真詩集から見れば、道真像のありようが分かるはずである。『菅家文章』『菅家後集』にうかがわれる道真の生涯を概観しておこう。漢詩は十四才から残っている(巻一)。対策(官吏登用試験の最難問)及第をへて文章博士、式部少輔に至り、文人として頂点に達する(巻一～巻二)。しかし、儒者の官を解かれ讃岐へ国司として赴任し(巻三～巻四)、宇多天皇の寛平年間に帰京、右大臣への道を歩む(巻五～巻六)。昌泰の変で左遷されたときの作は、『菅家後集』に収められる。

『和漢朗詠集』所収句をまとめると、少年時代の作一例、文章博士時代(対策及第から讃岐赴任まで)二例、讃岐国司時代九例、帰京・宇多廷臣時代は二十二例、大宰府時代三例となる。

表からも分かるとおり、『和漢

朗詠集』の道真詩は、過半数を帰京、宇多廷臣時代の作からとっている。道真が文人として栄達した時代である。一方、歌集では大宰府に「ながされ」た歌のみである。公任は、詩人道真には謫居の側面も認めつつも、文人として栄達したイメージを持っていた。歌人道真と詩人道真の作者像が異なっているのである。

歌人道真が帯びる「ながされ」た敗者像は、いかなる所にその淵源を見出すことができるだろうか。島津忠夫は「拾遺集」の道真詠の変容に、道真の配流説話の成立と流布を想定していたが、同時代の道真説話のうかがえる作品に、醍醐天皇墮獄説話である『日蔵夢記』と『道賢上人冥土記』(扶桑略記)天慶四年三月所引がある。特に『日蔵夢記』は十世紀の成立とされ、『源氏物語』桐壺帝墮獄のモチーフとなった説話として知られる。同時代の公任も当該説話を認識していた可能性がある。

『日蔵夢記』の内容は、仮死状態に陥った僧の道賢(後に日蔵)が蔵王菩薩の導きで死後の世界をめぐるというもので、そこで太政威徳天となった道真や、地獄に堕ちた醍醐天皇と出会うという説話である。道真の語りを引用する(傍線稿者)。

我是上人本国管丞相也。我当初愛別離苦之悲。上人聞不我恥。旧怨常新。每有古事談者。非不動我心。故我欲惱乱君臣損傷人民殄滅国土。卅三天我字日本太政威徳天。我主一切疾病災難事。我初思念用我生前所流之涙。必滅没彼国。遂成水海。經八十四年後。成立国土。為我住城也。而彼所有普賢龍猛等。盛流布密教。我素愛重此教。故昔怨十分之一息也。加以。化身菩薩等悲願力故。假神明。或在山上林中。或海辺河岸。各

尽知力。常慰諭。故未致巨害也。但我眷属十六万八千鬼神等
随处致损害。我尚難禁。況余神乎。

太政威徳天道眞は、自らを「愛別離苦之悲」により「主一切疾病
災難事」となつたと称しながらも、密教を崇敬していたことや菩
薩の悲願力などにより「神明」となつたと語る。

災厄は眷属が引き起こしているものであり、道眞を災厄の主体と
描かない点、十世紀末の脱怨靈化した道眞信仰に通ずる。さらに、
災厄の権化となつた原因が「愛別離苦」、すなわち愛する者との
別れの悲しみである点に注目すべきであろう。これは、公任が三
つの集にとつた次の歌を想起させる。

ながされはべりて後めのもといひおこせて侍りける

贈太政大臣

君がすむ宿の梢をゆくゆくと隠れしまでにかへり見しはや

(拾遺抄・別・二二七)

つくしよりふるさとおくりけるうた

菅丞相

君がすむやどのごずゑをゆくゆくとかくるまでにかへり見

しかな(金玉集・五五)

『深窓秘抄』は詞書を有さないため省略したが、公任がこの離別
歌を入集させたのは、道眞の「愛別離苦之悲」を知っていたため
ではないかと思われる。

公任と『日蔵夢記』との直接的な関係を指摘することはできな
いが、撰集当時、すでに道眞が都から退去するという悲劇が共有
されていたことは言えるのではないか。

以上、公任の道眞観とその背景を考察した。漢詩人としてはそ

の栄達を押し出し、一方歌集では、都から退去を余儀なくされた
敗者の像がうち立てられていた。その背景には、当時流布してい
た道眞説話が考えられる。すると、道眞母詠にみる、栄達を期待
される道眞像との関係が、問題となってくる。

五 『拾遺抄』の道眞母詠

前節において、公任による道眞像を探つたが、やはり道眞母詠
に見る人物像とは、相違していた。歌集中の和歌は、単体の意に
加え、配列中の意味づけもなされる。撰者の力量は、配列にこそ
大きく發揮されることになるだろう。公任はこの像の差異を、ど
のように安着させるのだろうか。

『拾遺抄』雑上は、三七六番歌から四三〇番歌まで四季、四三
一番歌から四四四番歌まで神祇・賀・別を含む雑、四四五番歌か
ら四七三番歌までが恋、四七四番歌から巻軸の四九六番歌までが
物名と、恋と物名が逆転するが、『古今集』の部立構成に類似し
た歌群が並ぶ。そこで、当該歌を含む四三二―四四四番歌までの
雑歌群が問題となる。この歌群は、二首一組で神楽・賀・羈旅の
主題が配されていく。

延喜廿年二月、亭子院春日に御幸ありける時、国司和歌
廿首よみてたてまつりけるなかに

めづらしきけふのかすがのやをとめを神もうれしとしのばざ
らめや(四三二)

冷泉院御時、大嘗会近江国和歌 元輔

とどこほるときもあらしをあふみなるおもののはまのあまの

ひつぎは(四三二)

延喜御時御屏風歌

つらゆき

松をのみときはとおもへばよともにながれて水もみどりなりけり(四三三)

題不知 読人不知

すみよしのきしもせざらむものゆゑにねたくや人にまつといはれむ(四三四)

此歌者住吉明神託宣云云

住吉にまうでてよみ侍りける

安法法師

あまくだるあら人神のおひあひをおもへばひさしすみよしの松(四三五)

惠慶法師

我とはは神よのこともかたらなむむかしをしれるすみよしの松(四三六)

天曆御時に内裏にて為平親王のはかまぎ侍りけるとき

参議小野好古

もししきにちとせのことはおほかれどけふの君にはめづらしきかな(四三七)

すがはらの大臣の元服し侍りけるよ、ははがよみ侍りけるひさかたの月のかつらもをるばかりいへの風をもふかせてしかな(四三八)

ある人の質し侍りけるに 権中納言藤原敦忠

千とせふるものつるをばおきながらひさしき物はきくにぞりける(四三九)

清和の女七親王の八十賀、重明親王のし侍りける時の屏風に、竹に雪のふりかかりたるかたあるところに

つらゆき

白雪はふりかくせどもちよまでにたけのみどりはかくれざりけり(四四〇)

題不知

ながれくるたきのしらいとたえずしていくらの玉のをとか成るらむ(四四一)

屏風に

伊勢

はるばると雲井をさしてこぐふねのゆくすゑとほくおもほゆるかな(四四二)

天曆十一年九月五日、齋宮のくだりはべりけるに内裏より硯調じてたまはすとて

御製

おもふことなるといふなるすずか山こえてうれしきさかひとぞきく(四四三)

円融院御時、齋宮のくだり侍りけるに、ははの齋宮もろ

ともにすずか山をこえはべりけるひよみ侍りける

齋宮女御

世にふれば又もこえけりすずかやまむかしやいまになりかはるらむ(四四四)

四三一〜四三二は神祇に関わる歌である。内容も、神前で上皇を賛美するものと、臣下が治世の永遠を寿ぐものとなっている。四三三〜四三四は松を詠み込む。住吉明神の託宣と注される四三四

番に続いて、「すみよしの松」を詠みこむ四三五〜四三六がおか

れる。詞書も同じ住吉参詣時の詠である。続く四三七〜四三八に為平親王袴着と道真元服の歌が並べられている。子の通過儀礼における宴席で詠まれた歌、後につづく算賀と同様に考えてよい。四三九〜四四〇は算賀。典型となる鶴と菊、千代と常緑の竹がそれぞれ詠み込まれる。長寿を象徴する歌につづき、「絶えず」「ゆくすゑとほく」と永続する未来を予祝する四四一〜四四二が置かれる。ここで神祇・賀歌群が終わり、斎宮下向の歌が置かれる。以上、二首一組の番が見てとれる。そこで問題にしたいのが、四三七〜四三八である。

天曆御時に内裏にて為平親王のはかまぎ侍りけるとき

参議小野好古

もしもしきにちとせのことはおほかれどけふの君にはめづらしきかな(四三七)

すかはらの大臣の元服し侍りけるよ、ははがよみ侍りけるひさかたの月のかつらもをるばかりいへの風をもふかせてしかな(四三八)

なぜ袴着と元服とが一括されるのだろうか。親王の袴着と、臣下の元服とが番とされる点も分らない。

そのことを考えるために、まず道真母詠がなぜ雑部に置かれてあるのかを考える。『拾遺抄』中、元服を詠んだ歌は道真母詠の他に二首ある。

宰相誠信朝臣の元服し侍りけるによみ侍りける

源順

おいぬればおなじ事こそせられければ君はちよませ君はちよま

せ(賀・二六九)

三善佐忠がかうぶりし侍るに

能宣

ゆひそむるはつもとゆひのこむらさきころものうらにうつれとぞ思ふ(賀・一七〇)

道真母詠が雑部に配列されたのは、元服という主題によるものではないことが分かる。ちなみに、勅撰集において元服の際の詠は、『後撰和歌集』の左掲歌から見え、すでに賀歌の主題として定着していた。

のりあきらのみこかうぶりしける日、あそびし侍りけるに、右大臣これかろうたよませ侍りけるに

つらゆき

ことのねも竹もちとせのこゑするは人の思ひにかよふなりけり(慶賀・一三七一)

道真母詠が賀ではなく雑上に配されたのは、道真には政治的敗者の人物像が付与されることを前提とするからではないだろうか。「文道大祖」としての像が垣間見えるこの歌も、実はやはり政治的敗者と位置づけられているのではないか。

さらに二首のそれぞれで祝福される子ども、つまり為平親王と道真という顔触れを考えるならば、賀とは異なる主題が見出される。為平親王は、皇位継承が期待されながらかなわなかった、政治的敗者なのであった。

六 為平親王と安和の変

為平親王は村上天皇の第四皇子であり、藤原師輔女の中宮安子

所生の子である。皇太子憲平親王（冷泉天皇）の弟であり、次代の皇位継承者と目されていたことががわられる。例えば『日本紀略』康保元年（九六四）二月五日条に、為平親王のための大規模な子の日御遊が催されているのは、このことを物語っている。九条家の家長師輔は、源氏である高明との結びつきを強め、為平親王元服にあたっては、高明が加冠役を拝している。さらにその後、高明女が為平親王と結婚し、姻戚関係を結ぶ。

期待されていた為平親王だったが、康保四年（九六七）に皇位は弟の守平親王（円融天皇）が継承する。冷泉天皇讓位が議論されるころ、師輔と安子はすでに薨去しており、もし為平親王が踐祚すると、源氏である高明に力が移ることとなる。これを嫌った藤原氏が、守平親王を擁立したと理解されている¹⁶。

為平親王の擁立断念を経て、安和の変が起る。安和二年（九六九）三月二十五日、源連らの謀反が露見し、連座して左大臣高明は大宰権帥に左降された。

守平親王の擁立は藤原氏による。しかしながら、藤原氏内部でも立場の相違が見られた。とくに、当該歌の作者小野好古が藤原伊尹の陣営であったことからわかるように、藤原氏内にも為平親王の庇護者はいいたのである。一方で、『拾遺集』雑下五七四番の藤原兼家による長歌からは、兼家が守平親王擁立に尽力したことがうかがえる。このように、藤原氏の中でも立場が異なり、兼家を除いて誰がどれほど関与したかは明確でない。

守平親王が皇太弟となった康保四年（九六七）前後の政権は、左大臣実頼、右大臣高明、大納言師尹と続く。そのなかで、藤原

氏長者実頼は藤原内で強い実権を持ち得なかったと、山本信吉は述べる¹⁷。公任の小野宮家には、守平親王擁立と安和の変との積極的な関与を見出しにくい。さらに、安和二年（九六九）当時、公任は四歳であり、変を直接的に体験した世代とは言えない。

公任が安和の変を語るとするならば、当事者ではなく、あくまでも伝聞となる。前代の史的事件として、為平親王と安和の変はどのように語られるのだろうか。

時代は下るが、『栄花物語』「月の宴」では、高明退去の場面を次のように語る。

三月二十六日にこの左大臣殿に檢非違使うち囲みて、宣命詔みののしりて「朝廷を傾けたてまつらんとかまふる罪によりて、大宰権帥になして流し遣はず」といふことを読みののしる。今は御位もなきなればとて、網代車に乗せてまつりて、ただ行きに率てたてまつれば、式部卿宮（引用者注 為平親王）の御心地、おほかたならんにてだにしみと思さるべきに、まいてわが御事により出で来たること思すに、詮方なく思されて、我も我もと出で立ち騒がせたまふ。北の方、御女、男君達、いへばおろかなる殿の有様なり。思ひやるべし。昔菅原の大臣流されたまへるをこそ、世の物語に聞こしめししか、これはあさましいみじき目を見て、あきれまどひて、みな泣き騒ぎたまふも悲し。

注目すべきは、為平親王を媒介として、安和の変に巻き込まれた人々の悲しみを、道真の昌泰の変と重ねている点である。中古の悲劇の道真と、近代の悲劇の為平親王とが並べられている。『拾

遺抄』がこの二首を一具とするのと、同工と言うことができる。

道真の栄達を祈念する歌が、政治的敗者を為平親王を予祝する歌の番と配されることにより、栄達が叶わなかった歴史的逸話が背後に浮かび上がってくる。この配列によって、道真母詠の道真像は、政治的敗者の色彩を帯びることになってくる。

七 『拾遺集』の道真像

『拾遺抄』における道真関連詠を見てきた。公任にとつて、道真は政治的敗者であり、それを前提とする配列がなされていることを指摘した。終わりに、その配列が『拾遺集』では変容していることを指摘したい。

『拾遺抄』では道真詠が二首、道真母詠が一首とられていたが、『拾遺集』では道真詠が五首に増補されている。『拾遺抄』から『拾遺集』への増補・変容について、片桐洋一は、①四季の時間的推移にそった再構成、②素材や歌題の増補、③歌合出詠歌など詠歌状況を同じくする歌の増補、④同一作者の増補の、四つに分類する。

『拾遺集』における道真母詠の位置は、次のようになってい

橘忠幹が人のむすめに忍びて物いひ侍りける頃、遠き所にまかり侍とて、この女のもとにいひつかはしける

わするなよほどは雲るに成りぬともそら行く月の廻りあふま
で（雑上・四七〇）

題しらず

つらゆき

年月は昔にあらず成りゆけどこひしきことはかはらざりけり

（四七一）

清慎公月林寺にまかりけるに、おくれてまうできてよみ侍りける
藤原後生

昔わが折りし桂のかひもなし月の林のめしにいらねば（四七二）

菅原の大臣かうぶりし侍りける夜、ははのよみ侍りける

久方の月の桂もをるばかり家の風をもふかせてしかな（四七三）

三

題しらず

人まろ

月草に衣はすらんあさつゆにぬれてのちはうつろひぬとも

（四七四）

四七〇で年月を天体の月と重ねて詠んだ離別歌を置き、そのま
ま月の歌群へ展開する。四七一の貫之歌はおなじく「年月」を詠
み、『拾遺抄』でも連続して配列されていた。後生と道真母が「折
桂」表現を詠み、人麿歌の月草へとつなぐ。配列の変更は、片桐
の分類によると、②素材や歌題の増補にあたる。月の桂の歌とさ
れている。

では、小野好古による為平親王袴着の歌はどうなっているのだ
ろうか。

人のかうぶりし侍りけるに

もとすけ

こ紫たなびく雲をしるべにて位の山の峯をたづねん

天曆御時、内裏にて為平のみこはかまぎ侍りけるに

参議好古

もしきにちとせの事はおほかれどけふの君はためづらしき

かな

(雑賀・一一七〇—一一七二)

道真母詠とは切り離され、元服の歌が増補されている。前歌が予祝を「位の山の峯をたづねん」と、見上げるものを取り合わせる点、道真母詠と類似している。しかし、『拾遺抄』から『拾遺集』へ改変されるにあたり、小野好古歌と道真母詠との並びは解体されている。『拾遺抄』の配列は独自であり、そこには撰者公任の意図が装填されていたのである。

八 おわりに

『拾遺抄』の道真詠は、配流に関する歌がとられるが、道真母詠に見る道真像は、栄達を期待する内容と見えた。「月のかつらもをる」という表現に、そのことはあらわれており、「折桂」の表現は、十世紀後半までに、文人間に広く共有されていた。

天神信仰の面から、『拾遺抄』成立時代、十世紀末の状況を考えると、贈位贈官や道真信仰から道真是顕彰される存在となっている。道真母の時代から百年後の『拾遺抄』にいたって、当該歌が入集する所以は、道真母詠が持つ表現と、栄達を期待される文人道真像が、ともに当時の道真像に適合するものであつたからか、とひとまず考えられる。

ところが、『拾遺抄』に見える道真詠と、この母詠との矛盾をどう解するかの問題が浮上する。本論ではまず、撰者公任の道真像を探るべく、他の公任撰の歌集中における道真詠を配列から分析した。『拾遺抄』後に成立した『金玉集』では、道真詠は小野篁の配流詠と並べて配されており、流謫の歌人とされている。『金

玉集』に続く『深窓秘抄』では、離別を主題とする歌群に置かれ、京を追われた悲劇の主人公としての像が浮かぶ。すなわち公任は、歌人道真を敗者と見ているのである。

これをふまえ、『拾遺抄』の道真母詠の配列を見ると、賀部にも元服の歌が配されるにも関わらず、元服を詠んだ母詠は雑部に置かれた。

さらに雑部のうち、当該歌を含む歌群は、二首を一組として構成されている。母詠は、為平親王袴着を祝う歌と組になっている。為平親王は帝位に就けなかつた皇子である。後に『栄花物語』は、安和の変の場面に為平親王を登場させ、昌泰の変の道真と重ねて語っている。そのような両人物に関わる通過儀礼の予祝歌を並べた公任は、実は政治的敗者の物語をこの配列の向こう側に企図していたと考えるのである。その企図は、『拾遺集』で解体されてしまった。『拾遺抄』独自の道真像、公任の道真観とすることができるだろう。

なお『拾遺抄』と為平親王の問題については、さらに稿を改めて論じることとしたい。

※引用したテキストは以下の通りである。『白氏文集』は『新釈漢文大系』、道真の漢詩は『日本古典文学大系』、『本朝文粹』は『新日本古典文学大系』、『政事要略』と『日本紀略』は『新訂増補国史大系』、『日藏夢記』は『神道大系(北野)』、『和漢朗詠集』と『栄花物語』は『新編日本古典文学全集』、和歌の引用は原則『新編国歌大観』による。これらによらない場合は適宜出典を示した。なお、表記を私に改めた箇所がある。

注(1) 山崎桂子「月の桂も折るばかり―道真母の一首をめぐって」『礫』

二六〇、二〇〇八年六月)

(2) 片桐洋一は『後撰集』に同様の詞書を見いだし、「歌物語的な資料によったもの」ではないかと指摘した(『後撰集の本性』、『後撰集』の物語性)―いずれも『古今和歌集以後』(笠間書院、二〇〇〇年)所収。掲出歌も、悲劇に見舞われた人物の物語を背景にしてている可能性がある。『後撰集』からの継承については別稿とする。

(3) 武井和人「菅原道真仮託家集・百首研究序説」(『中世和歌の文献学的研究』笠間書院、一九八九年、日崎徳衛「道真和歌の虚実」(『国文学解釈と教材の研究』三七―一二号、一九九二年一〇月)、島津忠夫「菅原道真の和歌」(『島津忠夫著作集』第十巻物語、和泉書院、二〇〇六年)など。

(4) 『晋書』(中華書局、一九七四年)による。

(5) 上海師範大学古籍整理研究所編『全宋筆記第二編』十(大象出版社、二〇〇六年)

(6) 編年体で詩が配される『菅家文章』において、折桂の表現が最初に用いられるのは、対策に及第した貞観二年(八七〇)作の「王大夫の対策及第を賀するの作に和し奉る」(巻一・五〇)に、「一枝の葦桂家君に謝す」とある。「一枝の葦桂」は虫食いの桂枝の意だが、成績が芳しくないまま及第したこと(を言う)。

(7) 菅原淳茂の作に「仙桂一枝攀月裏 儒風四業厭人頭」(『扶桑集』巻九・及第「対策及第後伊州藏刺史以新詩見賀不勝恩賞兼術鄙懐(次韻)」)などが見え、大江朝綱の作に「一言密雪将三葉 桂許門風各一枝」(『扶桑集』巻九・及第「澄明重光一度及第。不勝欣喜。書詩相賀」)などが見える。田坂順子「扶桑集」校本と索引(『権歌書房、一九八五年)参照。

(8) 金子彦二郎「増補平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇」(培風館、一九五五年)

(9) 池田利夫編『蒙求古註集成 上』(汲古書院、一九八九年)による。

(10) 濱田寛『世俗諺文全注釈』(新典社、二〇一五年)による。

(11) この背景には、摂政藤原兼家周辺の天神信仰と北野天満宮の勢力拡大が指摘できる。並木和子「撰闕家と天神信仰」(『中央史学』五、一九八二年三月)。

(12) 谷口孝介「菅原道真の復権と北野天満宮」(『菅原道真の詩と学問』塙書房、二〇〇六年)。

(13) 吉原浩人「文道の大祖考―学問神としての天神の淵源」(河野貴美子他編『アジア遊学 日本における文とブンガク』勉誠出版、二〇一三年)

(14) 注(3)の島津論文。「拾遺和歌集」の道真歌は五首のうち三首までが『大鏡』に引かれた歌と共通しており、「菅家後集」に見える道真の作品がすでに伝説を伴って、あらたにその頃に都にもたらされ、人々の注目を集めていたのではないかと思うのである。」

(15) 今井源衛「菅公と源氏物語」『今井源衛著作集8』(笠間書院、二〇〇五年)、田中隆昭「源氏物語と道真と天神伝説―『日蔵夢記』を中心に―」(和漢比較文学学会編『菅原道真論集』勉誠出版、二〇〇三年)など参照。『日蔵夢記』の成立については山本五月「道賢(日蔵)伝承の展開」(『天神の物語・和歌・絵画―中世の道真像―』勉誠出版、二〇一二年)、加島吉春「日蔵夢記」解題と諸問題」(『アジア遊学22』同) 菊地真「全釈 日蔵夢記」(学術研究出版、二〇一九年)など参照。

(16) 山口博「源高明論」(『王朝歌壇の研究 村上冷泉円融朝篇』桜楓社、一九六七年)、山本信吉「冷泉朝における小野宮家・九条家をめぐって」(『撰闕政治史論考』吉川弘文館、二〇〇三年)など参照。注(16)の山本論文。

(17) 片桐洋一「拾遺集」の組織と成立(『古今和歌集以後』笠間書院、二〇〇〇年)

【付記】 本論文は、早稲田大学国文学会秋季大会(二〇一九年一月)における口頭発表に基づいて成稿したものである。